九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

A Study on the Modernization of Korean Traditional Music in NANTA

李, 敬美
九州大学大学院芸術工学府

https://doi.org/10.15017/19759

出版情報：九州大学, 2010, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

序論

0.1 研究の目的

本研究の目的は，現代の韓国芸能のひとつであるノンバーバル・パフォーマンス「ナンタ」(乱打 난타)が韓国伝統音楽をいかに現代化しているかを明らかにすることである。ナンタは1997年にソン・スンファン（宋承桓 송승환）によって創始され，1999年にエディンバラ国際フェスティバルで高い評価を受け，韓国内に4ケ所の専用劇場を持ち，2008年まで400万人以上の観客を動員した[1]。ソン・スンファンは一見したところ伝統音楽と無縁に思えるナンタに韓国伝統音楽的要素が取り入れられていることを創始当初より明言していた。

1900代初頭頃までの韓国には王朝が存在し，儒教が国家統治理念として運営され，宮廷で行われた儀式音楽が伝統音楽と見なされて継承されてきた。しかし，1910年から1945までの日本植民地時代に韓国固有の文化が存亡の危機におそわれた。そのため，1948年に韓国政府が樹立されてからは韓国固有の伝統文化及び伝統音楽の継承のための努力が国家規模でなされている。

また伝統音楽の継承活動とは別に，その継承をもとに新たな音楽を創造しようという活動が同時に行われている。1960年代からは伝統音楽の継承のために韓国政府が政策的な支援を行い始め，1970年代に活発になって現在に至っている。ナンタは現代という時代から伝統音楽を捉えなおし，韓国の新たな音楽を創造しようという「伝統音楽の現代化」の最も成功した例として挙げられ，韓国のみならず国際的にも高く評価されている。

本研究では，ナンタにおける韓国伝統音楽的要素の継承を２つの面から分析する。ひとつは儀式・舞踊・軽業などの音楽外の要素を伝統的枠組みとして構成に取り入れたこと，もうひとつは音に対する韓国的感性の象徴とも言うべきリズム定型チャンダン（長短　장단）を音楽に取り入れたことである。チャンダンとは一定の長さ（拍数），固有のテンポ，固有のフレーズ感，アクセント

[1] ナンタのホームページ　http://nanta.i-pmc.co.kr（アクセス日：2010年10月1日）

を有する周期的なリズム型である[2]。韓国伝統音楽に欠かせないチャンダンは数多くの種類があり，それぞれ固有の名称を持つ。特にチャンダンの実演が，現実感あふれた現代的素材に置き換えられて構成展開されている点に着目し，ナンタにおける伝統音楽の現代化を明らかにする。ナンタでは，限定された種類のチャンダンを音楽の構成要素として用い，現代のテクノロジーと融合させることによって総合芸術としてのパフォーマンスを現出させている。ナンタがどのように伝統音楽を現代化したのかを明らかにすることで，今後の伝統音楽の発展に貢献することを期待する。

0.2 研究の背景

現在の韓国伝統音楽の演奏団体や教育研究機関は朝鮮戦争終了後の 1950 年以降に新たに設立されたものが多い。かつて韓国伝統音楽に関する研究は古くから伝わる文献資料を対象とするものがほとんどであったが，この頃から実証的な研究を行うようになった。

韓国伝統音楽の理論を確立する時に一般的に用いられたのは，継承されてきた伝統音楽を階層社会において分類する方法であった。それは宮廷音楽や上流階層の文人の中で継承された音楽を「正楽（정악）」に，一般庶民の中で発生して発展してきた音楽を「民俗楽（민속악）」に分けることであった。正楽とは古楽譜や文献によって継承されている発生年代が古いものや宮廷や上流階層で継承された音楽を指し，音の装飾が少ない[3]。それに対して民俗楽は，誰によって発生したのかが不明で，口伝による継承で地域性を持ち，即興的に装飾が加わる変奏が多く見られる[4]。

---

[2] 本論文では折に触れてチャンダンについての説明を行うが，チャンダンについての簡潔で要領を得た記述として植村幸生「解説サムルノリの方法」がある。この解説はキム・ドクス（清水 由希子訳）『世界を打ち鳴らせ―サムルノリ半生記』pp. 285 に掲載されている。

[3] ソ・ハンボム（徐漢範）『国楽通論』台林出版者，1981，pp. 85［原書名：서한범『국악통론』台林出版者，1981，pp. 85］

[4] クォン・オソン（權五聖）『韓民族音楽論』学問社，1999，pp. 150～151［原書名：권오성『한민족음악론』학문사，1999，pp. 150～151］

正楽と民俗楽による分類法以外にも，「宮廷音楽」「文人音楽」「民間音楽」「宗教音楽」と分類される場合[5]と「雅楽」「儀式音楽」「歌楽」「民俗楽」と分類される場合[6]がある。しかし，このような階層社会を基準にする分類法よりも，最近では韓国伝統音楽を韓国の歴史を基準に時代区分によって分類することも多い[7]。本論文でもこの分類に従う。

韓国伝統音楽において1960年代からは正楽と民俗楽の区別を超えた新たな音楽を生み出そうとする動きが始まった。その動きとは伝統楽器で演奏可能な曲のレパートリーを増やすことで新たに作曲する形で行われた[8]。それには二つの流れがある。ひとつは西洋音楽の様式で作曲したもので韓国伝統楽器を用いて演奏される曲であり，もうひとつは韓国伝統音楽，特に正楽，の様式を中心にを西洋音楽の様式に編曲したものである。前者のような音楽は西洋の管弦楽団に模した国楽管絃楽団により演奏され「新国楽」と呼ばれた。1973年代からは「韓国音楽創作発表会」が開催される[9]など作曲活動が活発になり，1970年代からは新たに作曲された曲に対して「創作国楽」と呼ばれ始めた[10]。

---

[5] 社会的な面からの分類で階層社会を中心に宮廷で行われた音楽を宮廷音楽に,宮廷ではないが上流社会で行われた音楽を文人音楽に,一般の庶民の間で行われた音楽を民間音楽に,仏教などの宗教的な音楽は宗教音楽に分類されることもある。クォン・オソン（權五聖）『韓民族音楽論』学問社,1999，pp.150～261［原書名:권오성『한민족음악론』학문사，1999，pp.150～261］

[6] 歴史的な面からの分類で中国から伝わった音楽は雅楽に宗教的な音楽は全て儀式音楽に,雅楽に含まれることもあるが上流階層の中で行われた歌曲,歌詞,詩調を全て歌楽に,その以外の一般民衆で行われた音楽は民俗楽に分類されることもある。ソ・ハンボム（徐漢範）『国楽通論』台林出版者，1981，pp.81～147［原書名:서한범『국악통론』台林出版者，1981，pp.81～147］

[7] 韓国伝統音楽史を王朝史の時代によって分類することが多かったが音楽の様式による変遷を重要な基準にした分類が多く見られる。 ジョン・インピョン（全仁評）『韓国音楽史』現代音楽出版社,2000,pp.20～25［原書名:전인평『한국음악사』 현대음악출판사 pp.20～25］

[8] ジョン・ジョン『近代性の侵略と20世紀韓国音楽』ブックコリア，2005，pp.211～213［原書名:전지영『근대성의 침략과 20세기 한국음악』북코리아，2005，pp.211～213］

[9] 韓国音楽創作発表会は国楽伝統楽器を用いた創作活動を支援するため国立国楽院の主催で1973年から現在まで行われている。ハン・ミョンヒ（韓明熙）『ウリ音楽100年』玄岩社，2005，pp.267～269［原書名: 한명희『우리음악 100년』현암사,2005,pp.267～269］

[10] 新国楽と創作国楽は既存の継承された伝統音楽以外に新しく創作された曲で特に韓国伝統楽器を用いて演奏することを想定して作曲された創作曲を指す。ビョン・ミヘ（卞美惠）『国楽用語編修資料集』,2004,pp.120～121［原書名:변미혜『국악용어편수자료집』,民俗苑2004，pp.120～121］，イ・ソヨン（李昭ヨン）『韓国音楽の内面化されたオリエ

1980 年代のには小編成の国楽室内楽団の活動が始められ，国楽室内曲も多く作曲された。国楽室内楽団は民俗楽の楽曲を編曲した演奏曲，民謡，「国楽歌謡」と呼ばれるような大衆的な曲を多く演奏した。国楽管弦楽団においても創作国楽曲と西洋の楽曲の変奏曲の演奏など活発な活動が行われた。

1990 年代には国楽管弦楽団や国楽室内楽団と西洋楽器との協演も多く見られるようになった。またテレビ放送においても伝統音楽を主とするプログラム[11]が編成されるなど伝統音楽に対する関心が高まった。1990 年代から 2000 年代以降に見られる特徴は国楽管弦楽団や国楽室内楽団以外にも新たな試みが見られるようになったことである。その試みは伝統楽器の西洋音楽化や西洋楽器による伝統音楽演奏などの従来の試みとは一線を画するものである[12]。

具体的には韓国伝統楽器のアンサンブルとジャズやロックバンド，演劇グループなどのコラボレーションを行うことや，電子的に加工した韓国伝統打楽器の音を素材とするコンピュータ音楽，さらにはメディアアート[13]の中で伝統音楽を演奏する試みなど，様々なスタイルのものが挙げられる。その中でも伝統音楽の本質を捉え，韓国音楽のあるべき未来を示唆しているものが音楽劇パフォーマンスにしたナンタである。ナンタで用いる音楽は直接サムルノリから影響を受けている。

また演劇と融合させているナンタには韓国民俗芸能である仮面劇のタルチュムからの影響が考えられるため，タルチュムについての調査が必要とされる。また制作者のソン・スンファンがナンタ制作において調査を行ったノンバーバ

ンタリズムを超えて』民俗苑，2005，pp.109［原書名：이소영『한국음악의 내면화된 오리엔탈리즘을 넘어서』민속원，2005，pp.109］

[11] 韓国の放送局の KBS(Korean Broadcasting System)では「国楽春秋」や「真夏の夜の国楽ジャズ広場」などのプログラム編成で伝統音楽と伝統音楽とジャズやクラシックを新たに演奏するような試みを行った。

[12] ハン・ミョンヒ（韓明熙）『ウリ音楽 100 年』玄岩社，2005，pp.273～279［原書名：한명희『우리음악 100 년』현암사，2005，pp.273～279］

[13] ディアアートとは，ニューメディアを用いた作品ニューメディアの特性を発想の中心にした作品を指す。ここでいうメディアとは，medium(中間)の複数形で，手段，媒体，報道，通信の意味である。狼煙・ 太鼓・鐘・新聞・雑誌などのオールドメディアに対して，テレビ・ラジ オ・ビデオ・コンピュータ・インターネットなどの電気・電子メディア をニューメディアと言う。中村滋延 「コンピュータ音楽考察」『現代音楽×メディアアート』九州大学校出版会，2008，pp.87～192

ル・パフォーマンスのストンプ(Stomp),ブルーマン・グループ(Blue Man Group),タップドッグス（Tap Dogs）の 3 作品についての考察を行う。

冒頭にも述べたように，本研究では韓国のみならず国際的にも評価されているナンタにおいてどのように伝統音楽的要素が用いられているかを明らかにする。そのためにはナンタに影響を与えたサムルノリと，そのサムルノリの起源であるプンムル（風物 풍물）の調査研究が必要となる。

プンムルは音楽や踊，儀式などが一緒に行われる総合芸能であり，その原型は古代朝鮮の紀元前 1 世紀から 6 世紀の三国時代にあるとされるが，現在の形態で行われるようになったのは 13～19 世紀の李氏朝鮮時代からである。そのプンムルを現代の音楽公演スタイルに適合するように再編したのが，1978 年に創始されたサムルノリである。したがってサムルノリとプンムルとの区別は一般的には曖昧にされてしまうことが多く，サムルノリ自体が伝統音楽として扱われることも多い。しかし，サムルノリにみるプンムルの再編こそが韓国伝統音楽の現代化が成功した具体例である。その視点に立って，プンムルからサムルノリへ，サムルノリからナンタへという韓国伝統音楽の現代化の流れを踏まえて研究を進めていく。

0.3 先行研究

サムルノリとプンムルとの関係，そしてナンタとサムルノリとの関係についての研究は，その密接な関係が創始者たちによって示唆されたこともあり，これまで多く行われて来た。それらの研究には以下のようなものがある。

プンムルとサムルノリに関する先行研究：

・プンムルの地域よる分類・比較に関する研究[14]

・地域においてのチャンダン変化に関する研究[15]

[14] ボク・ソンス「カンルン農楽と大田ウッタリ農楽の比較分析に関する研究」，牧園大学校産業大学院修士論文，2007,［原書名：복성수「강릉농악과 대전웃다리농악의 비교분석에 관한 연구」，목원대학교 산업대학원 석사논문，2007］

[15] ジョン・ゼフン「裡里農楽のソルチャングチャンダン変化に関する研究」，中央大学校大学院修士論文，2006 ［原書名：정재훈「이리농악 설장구 장단변화에 관한 연구」，중앙대학교대학원 석사논문，2006］

・プンムルとサムルノリのチャンダン比較に関する研究[16]

・サムルノリのチャンダン構成に関する研究[17]

・プンムルとサムルノリにおいての音楽教育学的研究[18]

ナンタに関する先行研究：

・ 伝統音楽にナンタをいかに活用するかの音楽教育学的研究[19]

・ 台詞なしの演劇として成功した例として演劇の可能性に関する研究[20]

・ 文化商品として輸出されたことに注目した文化経済学的研究[21]

・ 国際的な成功に注目した運営システムに関する研究[22]

このようにプンムルにおいては，地域による特徴に関する研究が主と行われ，サムルノリにおいては音楽教育学的研究としての指導方法と伝統リズムの教育方法に関する研究が，ほとんどであった。ナンタに関する研究においても「伝統音楽のリズムを学ぶためにナンタをいかに活用するか」というような音楽教育学的なものか，短期間での国際的な成功を勝ち得た点に注目したユニークな

[16] キム・ミンソン「右道農楽加楽とサムルノリ右道加楽の比較研究」，ソウル大学校大学院修士論文，2007［原書名：김민선「우도농악 판굿가락과 사물놀이 우도가락의 비교연구」，서울대학교대학원 석사논문，2007］

[17] リュ・インサン「サムルノリのクッコリチャンダン分析：ジョン・ストクのチャング演奏を中心に」龍仁大学校芸術大学院修士論文，2003［原書名：류인상「사물놀이의 굿거리 장단분석:전수덕의 장구 연주를 중심으로」，용인대학교 예술대학원 석사논문，2003］

[18] ジョン・ウンギ「ウッタリサムルノリ指導法研究」，龍仁大学校教育大学院修士論文，2003［原書名：정은기「웃다리사물놀이 지도 방안 연구」，용인대학교 교육대학원 석사논문，2003］

[19] ノ・ソンイン「ナンタを活用した活動中心の音楽授業の指導法研究」檀国大学校教育大学院修士論文，2004［原書名：노성인「난타를 활용한 활동중심의 음악수업 지도연구」단국대학교 교육대학원 석사논문，2004］

[20] イ・ジョン「ノンバーバル・パフォーマンスに関する研究：韓国のノンバーバル・パフォーマンスを中心に」中央大学校芸術大学院修士論文，2007［原書名：이지연「넌버벌 퍼포먼스에 관한연구 : 한국의 넌버벌퍼포먼스 중심으로［중앙대학교 예술대학원 석사논문，2007］

[21] ジョン・ジンス「韓国文化芸術の日本人観光客持続誘致法案：公演芸術“ナンタ”の観覧動機と満足度の観点から」『ceri エンタテインメント研究』Vol.5 韓国エンタテインメント産業研究院，2006［原書名：정진수「한국문화예술의 일본인관광객 지속유치 방안: 공연예술”난타”의 관람동기와 만족도 관점에서」『ceri 엔터테인먼트연구［ceri エンタテインメント研究］』Vol.5 한국엔터테인먼트산업연구원，2006］

[22] キム・ヒョンソン「ナンタの海外マーケティング事例研究」ソカン大学言論大学院修士論文，2003［原書名：김형성「난타의 해외 마케팅 사례 연구」서강대학교 언론대학원 석사논문，2003］

運営システムに関する文化経済学的研究であり，本研究のように「韓国伝統音楽をいかに現代化しているか」というような音楽・芸能自体についての具体的な検証を行う研究はほとんど存在していない。

0.4 研究の方法と構成

本研究は韓国伝統音楽の現代化に成功したナンタを通して見える「伝統音楽の現代化」についての研究に関するものであり，研究の根幹をなすのは，ナンタとプンムル，サムルノリとの比較である。その比較の前提として，韓国伝統音楽の現状と，サムルノリとナンタ以外の伝統音楽の現代化例についても調査する。そのことを通して「伝統音楽の現代化」という時の韓国伝統音楽とは何か，その現代化とは何かについても明らかにする。

本研究は文献調査とフィールドワーク調査に基づく分析が中心になる。韓国伝統音楽の現状についてのは韓国伝統音楽史を中心に文献調査を行った。伝統音楽の演奏状況に関しては韓国の国立国楽院，国楽博物館などの伝統音楽機関のフィールドワーク調査を行った。

プンムルとサムルノリに関しては現在活動中の団体を中心にフィールドワークに基づいてその分析を行った。ナンタに関してはナンタ専用劇場での公演を記録し，その記録を整理・分析し，ナンタに見られる伝統音楽的要素を抽出して考察を行った。また画像資料によるナンタとプンムルとサムルノリの比較考察を行い，その結果を図と表を作成した。それらの研究方法は以下の 3 つに集約される。

(1) 文献資料及び画像資料の収集と現状調査
(2) プンムル，サムルノリ，ナンタの共通点と相違点の分析考察
(3) ナンタ自体を分析し，ノンバーバル・パフォーマンスとしての特性を導きだし，韓国伝統音楽の現代化の可能性について考察

本論文はこうした研究方法によって以下のように構成されている。第１部は韓国伝統音楽の現状についてその継承と現代化を研究し，第２部はナンタに見る韓国伝統音楽の現代化を研究している。

第 1 章ではまず韓国伝統音楽の継承について述べる。継承については，国立国音院での伝統音楽の継承事例，それ以外の機関や各地方での無形文化財としての保存・継承事例を中心として取りあげる。第 2 章では韓国伝統音楽の現代化について述べる。伝統音楽の現代化例については，成功例としてのサムルノリとナンタを中心として述べる。それらを通して「伝統音楽の現代化」という時の韓国伝統音楽とは何か，その現代化とは何かについて明らかにする。

第 3 章ではプンムル，サムルノリ，ナンタの 3 つの音楽芸能を，音楽素材の共通性と異質性の側面から考察する。特に混同して扱われることの多いプンムルとサムルノリに関しては，その芸能としての性格の違いを明らかにし，その変遷を具体的に述べる。またサムルノリからナンタへ見られる音楽素材の共通性と異質性を音楽的側面から分析し考察する。第 4 章ではナンタに影響を与えた芸能として韓国の仮面劇タルチュムとノンバーバル・パフォーマンスについて述べた上で，劇としてのナンタについて論じる。第 5 章でナンタの伝統音楽の要素だけではなく，そこに導入されている現代的なダンス・ミュージックなども含めたナンタの音楽全体について分析し考察する。第 6 章ではナンタにおける伝統的要素と現代的要素の融合について考察を行い，第 7 章で結論を述べる。